

● 2月選評

小島なお

・まちりこ（埼玉県）

実はもう忘れてしまっている鳥を
もとのかたちにもどしてあげる

忘れるはずがないと思っっている大事な出来事でさえ、人は忘れてしまう。戻って
きた鳥を両手に包み、こんな温もり、こんな鼓動、といつか愛しなおせたら。

・さいう（愛知県）

よぎくらの発光

じよじよに淡くなり

きみの眼窩のみずぎわを 押す

発光するさくらを夜通し見つめ続けたきみの目のみずうみは、光に疲れて閉じ
られた。その窪みを指で柔らかく押すとき、昨夜の光の粒子がかすかさざめく。

・茶和鈴（東京都）

じゅうにひとえを

漢字で書いて

私じゃなかったと

微笑むあの子

あの子は十二単のどこに自分を期待していたのだろう。「じゅうにひとえ」のな
かに散らばる一二、自由、雲丹、一重、仁絵らが、期待外れにきらめく。

・氷丸（茨城県）

空き缶とまだねむる君

窓外に夜の本体だった裸木

空き缶も君もからっぽになっただけになってさやさや眠り続けている。窓の外のぜんぶの夜を統べる一本の裸木は、からっぽになった空間の隅々にまで夜を送りこむ。

・小沢旭（山梨県）

空には星を求めろくせ
空っぽが滲み広がるの
線路沿いのマンション

なにもないことには慣れてない。夜空には星があるはずで、人には心があるはずで。けれど、たしかになにもなさは存在し、ひっそりと深淵をのぞかせてくる。

・真島しましま（千葉県）

ここにいるぜんぶに名前をつけた
長いこと
手すりにもたれかかりながら

「長いこと」が数時間にも、数十年にも、数千年にも感じられてくる。創造主もきつとこんな手持ち無沙汰の孤独に、何かを待っていたのかもしれない。

・現人（東京都）

マックの2階の窓辺から
明るい人を見ていたよ
唾がかかるかと思っただよ

身振り手振りをまじえて、多くの言葉を発して、明るい人はいる。高さや距離やガラスをも貫通して、明るい人の明るさはときに否応なく沫いてくる。

・浪花 小楨（東京都）

隣人が泣いてるのかと思った
生まれ変わってゆく雪の音

聞こえないけれど聞こえてくる音。壁の向こうの隣人の涙の音のように、雪の気配が耳に届く。雪もなみだも、どこか期待に似た予感を伴いながら落下する。

・壺貫亨治（東京都）

曲がりくねった
記憶の糸を
風に飛ばせば
額に落ちる
二日目の雪

ひとつの記憶を辿ろうとすると、横道に逸れたり、迂回しなくてはいけない。いっそ風に手放してしまえば、思わぬところから忘れていた断片が訪れる。

・中山 霧（長野県）

喉仏、朝日のように上下する
ただぼくを飼うためだけの母

ぼくの喉仏が上下するたびにくりかえされる日の出、日の入り。母はぼくを飼育して、何十年も時間を浪費して、それだけのために存在しているようです。